



コレクション展3 見ることの冒険

2018年
1月27日(土)～6月24日(日)

| | |
|--------|---|
| 展覧会名 | コレクション展3 見ることの冒険 |
| 会期 | 2018年1月27日(土)～6月24日(日) |
| 開場時間 | 10:00～18:00(金・土曜日は20:00まで) ※チケット販売は開場の30分前まで |
| 会場 | 金沢21世紀美術館 展示室1～6 |
| 休場日 | 毎週月曜日(ただし2月12日、4月30日は開場)、2月13日(火) |
| 料金 | 一般=360円(280円) / 大学生=280円(220円) 小中高生=無料 / 65歳以上の方=280円 ※()内は団体料金(20名以上) |
| 出品作家 | リジア・クラーク、トニー・クラッグ、モニーク・フリードマン、イザ・ゲンツケン、 イエッペ・ハイン、角永和夫、小金沢健人、鈴木ヒラク、山崎つる子 |
| 出品点数 | 27点 |
| お問い合わせ | 金沢21世紀美術館 TEL076-220-2800 |
| 主催 | 金沢21世紀美術館[公益財団法人金沢芸術創造財団] |

本資料に関するお問合せ

事業担当: 山下樹里、立松由美子 広報担当: 落合博晃
金沢21世紀美術館 〒920-8509 金沢市広坂1-2-1
TEL 076-220-2814 FAX 076-220-2802
<http://www.kanazawa21.jp> E-mail: press@kanazawa21.jp



展覧会概要

見ることは、多くの人にとって、当たり前行為ですが、意識を持って見るということは案外に難しく、それゆえに色々なことを見逃してしまいがちです。

美術館という場所は、作品を「見ること」、「愛でること」、「考えること」に適した場所です。美術作品を鑑賞することが好きという方も、苦手という方も、この展覧会にご来場いただいた方に、「まずは作品をよく見ることから始めましょう」と言いたい。展覧会「見ることの冒険」はそこから始まります。

作品に、いつもより気持ちの上でもう一步近づいてみる、いつもより10秒長く立ち止まってみる、見尽くしたと思っても、もう少し見てみる。そこから、見えていなかった細部に気づいたり、様々な想像をめぐらせる時間が生まれるかもしれません。そこで得られる様々な発見や驚き、感動は、冒険物語のそれと変わらないと思います。

どうか積極的に作品と向き合い、自分自身の冒険譚を紡いでください。

(本展キュレーター 山下樹里)

展示構成と 展示作家

本展では、色、形、素材、表現方法の異なる作品や、抽象度が高く多様な見方ができる作品を展示します。展示室ごとに、見るためのヒントとなるキーワードを掲げて、来館者が作品を見る際の一助となる仕組みを作っています。

展示室1 「じっくり見る、見つけだす」

鈴木ヒラク SUZUKI Hiraku

1978年宮城県(日本)生まれ、神奈川県在住。

鈴木ヒラクは、平面、彫刻、インスタレーション、ライブドローイング、映像など、多岐にわたる表現方法を用いながらも、一貫して「書くこと」、「描くこと」について探求している。路上で目にする記号やことば、植物などの自然物やコンクリート片などの人工物まで、様々なかたちを発見し、収集・分解して、再構築することで新たな線やかたちを創造する。音楽家やファッションデザイナーとのコラボレーションなど、ジャンルを横断した活動も多数手がける。



《bacteria sign (circle)》2000
土、枯葉、アクリル/木製パネル H45×W45×D0.9cm
金沢21世紀美術館蔵 © SUZUKI Hiraku
photo: SAIKI Taku

カプーアの部屋 「しゃがんで見る、横から見る」

アニッシュ・カプーア Anish KAPOOR

1954年ムンバイ(インド)生まれ。ロンドン(英国)在住。

幼少期をインドで過ごし、17歳で渡英したアニッシュ・カプーアは、1970年代後半より作品を発表し始める。初期には、表面を顔料で覆う立体作品を多く制作するが、それらは次第に内部を露わにするようになる。岩盤のような床に切り込みや穴を開け、その内部を顔料で覆うことにより、洞窟の入口や大地の亀裂を思わせる作品へと繋がっていく。また、ステンレス・スチール、漆といった素材、蒸気そのものを作品に取り入れるなど、多様な表現を展開してきた。これら

らの作品は、常に我々の視覚や日常的な認識の再考を促す。次元を越えて生み出される未知なる世界像には、人間存在、生命へのカプーア独自のまなざしが映し出されている。



《L'Origine du monde》(世界の起源) 2004
楕円の長径: 700cm
金沢21世紀美術館蔵 © Anish Kapoor

展示室 2 「近づいたり、遠ざかったり」

山崎つる子 YAMAZAKI Tsuruko

1925年兵庫県芦屋市生まれ、同地在住。

山崎つる子は1954年に結成された「具体美術協会」の草創期のメンバーであった。その後もAU（アーティスト・ユニオン）、展覧会等、様々な活動において、ブリキを用いた立体、パフォーマンス、絵画といった多様な作品の制作を行っている。数十年に及ぶ制作活動を通して、山崎は一貫して実像と虚像、視覚・認知・再現をテーマに制作を続け、個と世界との関わりについて独自の視点で表している。「具体美術協会」のリーダーであった吉原治良が述べた「他人のやらないことをやれ」に象徴される前衛的な美術論はその後の山崎の制作活動に多大な影響を与えた。



《作品》1963
アクリル/カンヴァス H212.2×W136.4cm
金沢21世紀美術館蔵 © YAMAZAKI Tsuruko

モニーク・フリードマン Monique FRYDMAN

1943年タルヌ県ナージュ（フランス）生まれ、パリ、スナン
ト在住。

現在、フランスを代表する女性作家のひとりであるモニーク・フリードマンは、1970年代終わりから作家活動を開始した。絵画制作を中心に据え、色と光の表現をカンヴァス、顔料、パステル、紐、紙などの素材を用いて追求する。自身の身体と素材との親密で双方向的なダイアログ（対話）の中で浮かび上がっていく色やイメージには、時には作家自身も気がつか
なかつた自らのルーツや過去の記憶の断片が表出し、我々ひとりひとりの記憶や心をも揺さぶる。近年では、ガラスやプレキシガラス、紙や布などを用いたサイト・スペシフィックなインスタレーション（特定の場所に帰属する作品）も手掛けている。



《アマランス色、「輝き」シリーズより》2004
顔料、パステル、バインダー/麻布
H250×W250cm 金沢21世紀美術館蔵
© Monique FRYDMAN
photo: SAIKI Taku

展示室 3 「目で追いかける、目をとじてみる」

小金沢健人 KOGANEZAWA Takehito

1974年東京都（日本）生まれ、広島県尾道市在住。
武蔵野美術大学で映像を学んだ小金沢は、在学中より「スタジオ食堂」の活動に参加し、1997年には横浜で開催されたグループ展で映像作品を発表している。卒業後まもなくドイツに渡り、2017年初頭までベルリンを拠点に制作を続けてきた。映像を軸としてパフォーマンスやドローイング、そしてインスタレーションへと表現の幅を広げ、国内外で作品を発表。日常の機微を鋭敏に察知し、そこに潜む謎や不穏、美しさやおかしみを浮かび上がらせる作品は高い評価を受けている。



《蝶を放つ》2015
HD映像、紙、水性顔料 サイズ可変
金沢21世紀美術館蔵
© KOGANEZAWA Takehito

展示室 4 「ぐるりと見る、動きを見る」

角永和夫 KADONAGA Kazuo

1946年石川県鶴来町（現白山市、日本）生まれ、石川県金沢市在住。

当初、画家を志していた角永は、コンセプチュアル・アートを学ぶ中で、木を素材とした作品を制作するようになる。皮を剥いた杉の丸太を横にスライスした作品や、同じく丸太を小さなブロックに裁断した後、再び丸太の姿に構成するといった制作スタイルを1980年代に確立。ガラスや紙、竹など、他の素材を用いる場合も人為的な加工を極力排除し、素材がもともと持ち合わせている性質や作品の生成のプロセスを可視化するような制作態度を貫いている。



《Glass No.4 H》1998
ガラス H83×W83×D77cm
金沢21世紀美術館蔵 © KADONAGA Kazuo
photo: NAKAMICHI Atsushi / Nacása & Partners



《Wood No.5 CJ》1984
杉 H58×W427×D53
金沢21世紀美術館蔵 © KADONAGA Kazuo
photo: SHOZU Kazuo

トニー・クラッグ Tony CRAGG

1949年リヴァプール（英国）生まれ、ヴッパータール（ドイツ）在住。

一貫して、物と物の関係性への洞察を反映させた作品を発表し続けている作家である。その対象は人工物から自然界の物まで幅広く、その形態や機能に目を向けることで深い繋がりを見つけ出す。部分が全体となり全体が部分となってしまうような生命体的感覚を物の配置によって表現したり、物に生じる機能としての使用価値や交換価値の増減にも着目している。近年は特に生命の有機的な形を解析して立体化した彫刻を多く発表している。



《何としても》2001
大理石 H247×W90×D90cm
金沢21世紀美術館蔵 © Tony CRAGG
photo: NAKAMICHI Atsushi / Nacása & Partners



《私自身の》2001
フィアバーガラス、エポキシ樹脂 H160×W230×D180
金沢21世紀美術館蔵 © Tony CRAGG
photo: SAKAI taku

展示室 5 「とじたら、ひらいたら」

リジア・クラーク Lygia CLARK

1920年ベロ・オリゾンチ（ブラジル）生まれ、1988年リオ・デ・ジャネイロにて逝去。

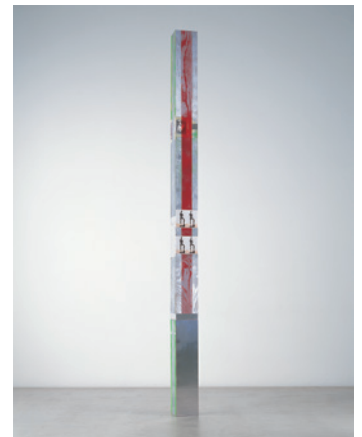
1950から1951年にパリに渡り、アルパド・スゼンヌに師事。帰国後、ブラジル国内を席卷していた合理的な幾何学的抽象を推し進める「具体主義」を継承するも、やがてエリオ・オイティシカやリジア・パペらとともに「新具体主義運動」を立ち上げ、幾何学的な造形に主観や表現性を回復することを唱えた。鑑賞者が作品に関与し相互に作用する「動物」シリーズなどを手がけるが、やがてそれらは、身体的な関心へ向かい、鑑賞者の感覚を実験するような作品を手掛け、メビウスの輪や衣服のような内部と外部が反転する作品の制作へ向かう。ブラジルを代表する現代作家のひとりとして活躍し、1961年には「動物」シリーズでサンパウロ・ビエンナーレ最優秀彫刻賞を受賞。

展示室 6 「歩き回って見る、立ち止まって見る」

イザ・ゲンツケン Isa GENZKEN

1948年パート・オルデスローエ（ドイツ）生まれ、ベルリン在住。

1980年代初頭、床置きの大掛かりな彫刻で注目を集める。その後、油彩、写真、映画など多岐にわたるメディアを用いながら作品を制作。荒々しさと繊細さ、開放性と閉塞性、透明性と不透明性など相反する2つの概念をひとつの俎上に載せるような作品を作り続けている。緻密な計算と意外性を併置して、その両者の均衡をとろうとする作家である。



《レームブロック》2000
木、金属、アルミ箔、ポストカード
H320×W20×D18cm
金沢21世紀美術館蔵 © Isa GENZKEN
photo: SAIKI Taku

イエツペ・ハイン Jeppe HEIN

1974年コペンハーゲン（デンマーク）生まれ、ベルリン（ドイツ）在住。

コペンハーゲン王立芸術アカデミー卒業。円や四角形などの単純な幾何学的形態、白などの無彩色、鏡や透明な素材を多用し、一見1960年代のミニマルズムの作品にも見えるような立体作品を制作する。だが、その作品には観客の動きに反応して動き出す機構が組み込まれていたりするなど、いたずらっぽいユーモラスな作風である。茶目っ気たっぷりに観客の作品に対する緊張感をほぐしながら、観客同士の間コミュニケーションを生み出すことを意図した作品も多い。アムステルダム国立美術館の庭園に設置された噴水やに設置されたコペンハーゲンのカストラップに設置された変型ベンチなど、常設のパブリック・アートも手掛ける。



《回転するピラミッドII》2007
鏡、動力装置 H200×W200×D110cm
金沢21世紀美術館蔵 © Jeppe HEIN
courtesy: Johann König, Berlin, 303 Gallery, New York, and
SCAI The Bathhouse, Tokyo
photo: KIOKU Keizo

広報用画像

画像1～9を広報用にご提供いたします。

ご希望の方は下記をお読みの上、広報室へお申し込みください。

Email: press@kanazawa21.jp

[使用条件]

※広報用画像の掲載には各画像のキャプションとクレジットの明記が必要です。

※トリミングはご遠慮ください。作品が切れたりキャプション等の文字が画像にかぶったりしないよう、レイアウトにご配慮ください。

※情報確認のため、お手数ですが校正紙を広報室へお送りください。

※アーカイヴのため、後日、掲載誌（紙）、URL、番組収録のDVD、CDなどをお送りください。

以上、ご理解・ご協力のほど、何とぞよろしくお願いいたします。